

意見表明の言語行動の日中対照研究

胡歡

要旨

はじめに

本研究で言う「意見表明」とは、話者の評価、主張、考え、感情、意思等、及びそれらを支持する個人の経験や一般的な事例等を述べることである。意見表明と言う言語行動は、2つの側面を持っている。1つは、自分から意見を表明するという、働きかけとしての言語行動である。もう1つは、相手から何かを言われた時の応えとしての意見を表明するという言語行動である。本研究は後者の方を、つまり相手からの働きかけに対してどのように返答しているのかを中心に考察する。

日本語母語話者と中国語母語話者がそれぞれどのように意見を表明するのか、その違いを探ることが本研究の目的である。意見表明のような言語行動は、特に相手の発言に対して異なる意見を表明することは、誤解になったり、不愉快になったりする危険があるため、対人的配慮が必要になる。さらに、異文化コミュニケーションにおいては、話者が各自の文化に応じて無意識に言語行動を取るため、文化による摩擦が生じることがある。しかし、今までの日中対照の先行研究では、依頼とその返答としての断り或は受諾、誘いとその返答としての断り或は受諾に関するものが多いが、意見表明を取り上げる研究がまだ少ないため、日中両言語における意見表明の特徴を探ることは有意義な試みであると考えられる。

したがって、本研究は隣接ペアの観点を利用し、働きかけられた時の返答としての意見表明を中心に、日本語母語話者と中国語母語話者がどのように意見を表明するのかを明らかにしたい。また、意見表明の仕方に影響する要因にはどのようなものがあるのかを検討したうえで、各要因はどのように意見表明の仕方に影響するのかを考察する。

論文の構成

本論文の構成と各章の概要は次の通りである。

第2章は、まず、本研究の理論的枠組みとなるポライトネス理論を説明する。その後、今までの意見表明の研究に関する文献を、アプローチ、意見表明の仕方に影響す

る要因，中間言語・異文化比較などの面からレビューし，自分なりのリサーチデザインを提示する。

第3章では，データ収集，分析の枠組み，集計方法等を詳述する。

第4章では，日本人の社会人を対象に実施したアンケート調査の分析結果に基づき，第1発話者にも第2発話者にも直接関与しない外的情報に言及される場面（場面一）と，第2発話者のみに関わる私的情報に言及される場面（場面二）という2つの場面における，意見表明のストラテジーを使用頻度，対人関係（親疎，上下），性別の観点から詳しく考察する。

第5章では，中国の社会人による談話完成テストのデータに基づき，5章と同じ手順で，先行発話の性質によって分けられた2つの場面，即ち第1発話者にも第2発話者にも直接関与しない外的情報に言及される場面（場面一）と，第2発話者のみに関わる私的情報に言及される場面（場面二）における，意見表明のストラテジーを使用頻度，対人関係（親疎，上下），性別の観点から詳しく考察する。

第6章では，第4章の日本語における意見表明の研究結果と，第5章の中国語における意見表明の研究結果を，日中対照の観点から，返答の内容構成，意見表明のストラテジー，対人関係の要因，被験者の性別の要因を，場面ごとに比較し，意見表明の言語行動における日中両言語のそれぞれの特徴と相違点を究明する。

第7章では，具体的なサブストラテジーについて，平均使用個数，2場面における使用頻度と割合などを分析する。また，対人配慮の観点から，各サブストラテジーの意味内容を考察する。

最後に，第8章で，本論文の主張，研究結果から得た知見，日本語教育への示唆，今後の課題を述べる。

研究方法

本研究は2008年から2009年かけて，20代，30代の日本語母語話者と中国語母語話者を調査対象とし，談話完成テストによるアンケート調査という方法で，データ収集を行った。日本語の調査は2008年9月10日～2009年5月22日の間に行った。調査対象は東京に在住或いは勤務している社会人52人であった。そのうち，女性29人，男性23人であった。年齢は22歳から39歳までであった。中国語の調査は北京にいる知り合いに依頼し，アンケートを実施してもらった。調査期間は2008年9月6日～2008

年10月17日であった。調査対象は、北京に在住或いは勤務している社会人55人であった。そのうち、女性28人、男性27人であった。年齢は24歳から39歳まででした。日本語の調査票と中国語の調査票は、人名や地名といった固有名詞以外、すべて同じである。

対話相手は、4人の相手と設定した。即ち親しくない上司、親しくない同僚、親しい先生、親しい友達という4人の対話相手である。会話場面は2つに設定した。場面一は、木村拓哉の話が話題になっているような、先行発話者にも被験者にも直接関与しない外的情報の場面である。場面二は被験者のもと勤務先の話が話題になっているような、被験者のみに関わる私的情報の場面である。被験者に、この2つの場面に置かれた状況で、4人の相手に対して、それぞれどう返答するかを、合計8通りの回答を記入してもらった。

分析方法

分析と考察1は、以下の手順で場面ごとに行った。

- ① 被験者の返答が先行発話のどの部分に言及して返したか、また、1つの返答が先行研究の構成部分の何か所に言及したか、という返答の内容構成及び内容構成のパターンを考察した。
- ② すべての返答について、先行発話の事実の部分に対して同意・不同意を表明しているか、または評価の部分に対して同意・不同意を表明しているか、という意見表明のストラテジーをコーディングし、全体的な使用頻度を計算、考察した。返答の最初に用いられる意見表明のストラテジーについても分析を行った。
- ③ どのような先行発話者にどのような意見表明のストラテジーを使うか、という上下関係・親疎関係の観点から、被験者の対人関係の捉え方を分析した。

最後に、日本語の結果と中国語の結果を比較した。

分析と考察2は、サブストラテジーに注目して、外的情報に言及された場合と、私的情報に言及された場合、日本語母語話者と中国語母語話者がそれぞれどのように(つまり、何を言って)意見を表明するのか、その具体的なサブストラテジーについて、以下の手順で詳しく考察する。

- ① 各種のサブストラテジーは、具体的にどの場面で使用されるか、どの言語で使

- 用されるかについて検討する。また、1 返答あたりに使用されるサブストラテジーの種類の数、即ち、サブストラテジーの平均使用個数についても分析する。
- ② サブストラテジーの各種の組合せ（単独使用と併用を含むすべてのバリエーション）について、言語による使用割合の異同と、場面による使用割合の異同を検討する。
- ③ 各種のサブストラテジーの意味内容について、対人配慮の観点から詳述する。

結果と考察 1

本論文においては、以上の観点からの分析結果と考察の結果、次の諸点が明らかになった。

- A) 第 2 発話者の意見表明を内容構成のパターンで捉えることによる、日中両言語における意見表明の構成上の共通点は、私的情報の場面における「異」と「誤+異」の返答パターンの多用である。外的情報の場面では、日本語における「誤」と「正+異+誤」のパターンが多いが、中国語における「誤」と「他」のパターンが多い。
- B) 日中両言語における意見表明のストラテジーの選択に関する共通点は、世界知識情報の場面における「事実の誤りに不同意」の最多と評価に対する同意・不同意の最少、私的情報の場面における「評価不同意」の最多と事実としての同意の最少である。相違点は、外的情報の場面における中国語の「回避」の多さが目立っていることである。
- C) 日中両言語における意見表明のストラテジーの選択に関する、先行発話者との話者関係（上下関係、親疎関係）による相違点は、2つの場面ともに見られた。外的情報の場面では、日本語においては、親しい先行発話者への不同意が多く、同意が少ないが、中国語においては、目上の先行発話者への不同意が少なく、親しい先行発話者への「正しい事実に同意」と「回避」が多い。私的情報の場面では、目上の先行発話者への「評価同意」が多く、親しい先行発話者への「評価不同意」が多い。親しい同等の友達に対しては、中国語の場合、「評価不同意」が多く、「事実の誤りに不同意」が少ないが、日本語の場合「評価同意が多い。
- D) 日中両言語における意見表明のストラテジーの種類は、話者（先行発話者、被験者）2人と先行発話との関係によって差異がある。外的情報の場面に使用さ

れるストラテジーの種類は、私的情報の場面より多い。

結果と考察 2

日本語母語話者と中国語母語話者のサブストラテジーの分析結果を、以下のようにその異同をまとめる。

- 1) 使用割合の上位 3 つのサブストラテジーを下表に示す。

表 1 使用割合の上位 3 つのサブストラテジー

順 位	日本語母語話者		中国語母語話者	
	外的情報	私的情報	外的情報	私的情報
1	「共感・賛成」	「評同+評表」	「否・指」	「評表」
2	「否・指」	「評表」	「否・指+（不）情提」	「評価に不同意」
3	「（不）情提」	「（不）情提+評同+評表」	「感想叙述（対事的）」	「評同+評表」

- 2) 日中ともに、「評価」を中心とするストラテジーは私的情報の場面で多く使用されているが、それに対して、「事実」としての不同意はほとんどが外的情報の場面で使用されている。「共感・賛成」で間違っただけ事実にもよく同意を示すことは、日本語の特徴の 1 つである。
- 3) 「（不同意）情報提供」というサブストラテジーは、外的情報の場面では単独使用が多いが、私的情報では「評価」を示す各サブストラテジーと組合せて使用する傾向がある。
- 4) 1) と 2) から分かるように、日中ともに、外的情報の場面では、人は「事実」を問題にするのに対して、私的情報の場面では、人は「評価」を問題にする。
- 5) 日中ともに、私的情報の場面より、外的情報の場面のほうが、サブストラテジーのバリエーションが多い。
- 6) 1 返答あたりのサブストラテジーの平均使用個数は、日本語では、外的情報の場面より私的情報の場面のほうがやや多いが、中国語では、外的情報の場面と私的情報の場面との差異は明確ではない。